



灘高等学校長 和田 孫博

私は神戸にある灘中学校・高等学校出身で、京都大学文学部で英文学を学び 1976 年に卒業後すぐに、母校に就職し現在に至っている。生徒の頃を含めると四十数年灘校で生活している。その意味では全く「井の中の蛙」であるのだが、一方で「灘校」については誰よりもよく知っているという自負はある。と言って、この拙稿で本校の宣伝をするつもりは毛頭ない。ただ、本校の創設において嘉納治五郎が参画していなければ、今の本校は無いと言っても過言ではない。小生が校長になって十年が経ったが、中学 1 年生に毎年校史を教えてきて、あらためて嘉納治五郎の偉大さを痛感している。現在教育界でその重要さが叫ばれているグローバル人材のロールモデルとして顕彰するに足る人物であると確信している。そこで日本の、いや世界の未来を支える若者の為に、国際人としての嘉納治五郎について語ってみたい。

おいたち — 講道館創設まで

嘉納治五郎は 1860 年、灘五郷の 1 つ御影郷に生まれた。彼の生家は菊正宗酒造を営む本嘉納家の分家筋に当たり、もともとは「剣由（けんよし）」という屋号の造り酒屋だったのだが、当時最大の消費地であった江戸に清酒を送るための樽廻船を共同運行しようということになり、治五郎の父、次郎作はこの廻船業を生業とするようになった。幕末の幕府において廻船方御用達を務め、勝海舟のパトロンの存在となって、和田岬砲台の建造を請け負った。また、神戸海軍操練所（1864 年に幕府が神戸に開いた海軍士官養成所、坂本竜馬や陸奥宗光もその練習生であった）の開設中、勝は次郎作の家に滞在したとのことである。次五郎はその時まだ 3, 4 歳だったが、物心はついていたのではなかったか。後に東京に出てからも勝との交際は続いていたようで、講道館の道場落成式に来賓として招待している。講道館には勝の扁額が今も保存されていると聞く。

明治維新後、嘉納次郎作は勝の推薦を受けて新政府に仕えるため上京、当時 9 歳だった治五郎も同行した。貿易や海運を担当した次郎作は外国語の重要さを認識し、子弟にも英語教育を受けさせた。治五郎は 12 歳で私立育英義塾に入学し、英語・独語を学び、翌年には官立外国語学校に入学、英語を学んだ。治五郎の英語力や国際人としての素養はこの時期に形成されたのだと思われる。そして 14 歳で官立開成学校（途中で東京帝国大学に改称された）に入学、政治学や理財学を学んで卒業、その後道義学や審美学の専科（今でいう大学院）に入っている。英語力の上に、実学も哲学的教養も身につけたわけである。

嘉納治五郎は身長 160 センチ足らず、明治の初期としても決して大きな身体の持ち主ではなかった。自身は身体が弱いというコンプレックスがあったようで、父親の反対を受けながら、柔術の道場に通った。いくつかの流派の門をくぐってみると、それぞれの教えが

かなり異なる。そこで、同輩や後輩を集めて自分たちの道場を開いた。治五郎 21 歳の時。これが講道館の始まりである。

「文武両道」を超えた「文武不岐」・「文経武緯」

ほぼ同時期に、頼ってきた書生たちを集めて嘉納塾を開設した。おそらくは講道館の館員と嘉納塾の塾生はメンバーがかなりかぶっていたと思われるが、講道館は「武」を鍛える場であり、嘉納塾は「文」を鍛える場という区別をつけていたのであろう。まさに「文武両道」を実践したのであろう。

このことについてもう少し述べると、嘉納は「文武不岐」という言葉を使っている。つまり、「文武両道」は「文」と「武」は別々のものであり、その両方をやろうと推奨している感があるが、「文武不岐」なら「文」と「武」は本来分けられないものであるということになる。つまり、学問においても集中力や忍耐力など「武」の要素が不可欠であり、一方、thinking baseball という言葉もあるように、スポーツにおいても「文」の要素が不可欠なのである。

治五郎はさらに、揮毫において右肩に押す印（関防印または引首印）に「文経武緯」という四字熟語をしばしば用いているが、これは「文」が縦糸で「武」が横糸であり、すべてのものがこの両要素によって成り立っているということを伝えているのではないかと思う。中国の晋書に「緯武经文」という同じ意味の言葉があるからこれをもじったのかもしれないが、治五郎の考えの深さが窺い知れよう。

若い頃から柔道の国際的普及に尽力

22 歳で専科を卒業して学習院に勤め、26 歳で教頭に昇進するが、その間も柔道の普及に努め、28 歳の時、英語で『Jujutsu The Old Samurai Art of Fighting Without Weapons』(T. リンゼイ氏との共著)を発売した。嘉納治五郎が若い頃から柔道の国際的普及を目指していた一つの証拠であろう。

1889 年、ヨーロッパの教育視察に派遣される。1 年半かけて、上海経由でフランス、ドイツ、オーストリア、北欧、そしてイギリスを訪問。カイロ経由で帰国する。この外遊は治五郎の世界に対する視野を大きく広げたに違いない。帰国後、熊本の第五高等学校長に就任するが、そこにラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が英語教師として赴任してきた。治五郎はハーンにも柔道の手ほどきをした。ハーンは感銘を受け、1895 年に出版した随筆集『Out of the East』(『東の国から』)の中で「Jujutsu」という文を載せた。外国人として初めて柔道を紹介したのである。

その後治五郎は、第一高等中学校（一高）の校長を経由して、1893 年に東京高等師範学校の校長に就任し、以後 2 度の中断はあるが、60 歳を迎えようとする 1920 年に依願退職するまで、大正期から昭和初期にかけての四半世紀以上に亘り、全国の小中学校の幹部教員を送り出し続けたのである。その意味では超一流の教育者であったと言えよう。

一方、講道館館長としても普及のための施策を次々と展開する。1893 年には女子の門下生を受け入れる。そして 1896 年からは清国の留学生を私費で受け入れることも始めている。また、講道館の門下生が欧米で柔道の紹介と普及に努め、柔道は徐々に世界的スポーツとして認められるようになっていったのである。

アジア初の I O C 委員へ ― 一貫した国際協調主義

1852年にギリシャのオリンピアで古代遺跡が発掘され、19世紀中ごろからヨーロッパ各地でオリンピックの名を冠する競技会が開かれるようになった。中でも古代オリンピックの開催地であったギリシャは、トルコからの独立を機に、オリンピックの復活を目指し、ザッパス・オリンピックという国内競技会を19世紀後半に計4回開催している。また、イングランド中西部のマッチウェンロックという小さな町ではオリンピックという名の競技会を1850年から毎年開催している（現在も続いている）。

このようなオリンピック復興に向けたさざ波を大きなムーブメントにしたのが、フランス生まれのクーベルタンである。クーベルタンは男爵家の生まれであったが、普仏戦争の敗戦を引きずるフランスの沈滞ムードを打破するには教育改革しかないと考えようになり、スポーツを取り入れた教育の推進に力を入れる。「教育における身体訓練普及委員会」を組織するなど、思想的には嘉納治五郎と相通じるところがあったようだ。嘉納治五郎が講道館を創設した同じ年、クーベルタンはフランスでフェンシングクラブを創設している。そして、イギリスなどヨーロッパ各地の教育・スポーツ事情を視察する中で、オリンピックの復興を模索するようになったのである。1894年、国際オリンピック委員会（I O C）を結成し、2年後の1896年アテネで第1回を開催する。そして自ら第2代のI O C会長に就任し、以後4年ごとの開催を軌道に乗せたのである。

しかし、当時の参加国はヨーロッパ諸国、アメリカ、それらの旧植民地からの独立国がほとんどで、東アジアの国はどこも不参加であった。できるかぎり全世界的な大会にしたいというクーベルタンは、1908年の第4回五輪ロンドン大会の後、駐日仏大使にI O C委員として適当な日本人の推薦を依頼した。その答えは嘉納治五郎であった。

翌年、嘉納はアジア初のI O C委員に就任したが、日本にはまだすべてのスポーツを統括する組織がなかった。そこで各競技の有力者を引き入れ、1911年に大日本体育協会の設立にこぎつけ、自ら初代会長に就任した。そして、翌年の第5回五輪ストックホルム大会に曲がりなりにも2名の選手を連れて団長として初参加を果たしたのである。その地でクーベルタンとの対面も叶っている。第6回大会は第一次世界大戦のために中止になったが、第7回アントワープ大会に臨席し、クーベルタンと再会した。この大会ではテニスで日本人初めてのメダル（銀メダル）を獲得している。大会後、嘉納はロンドンで柔道の実演と講演を、帰路ロサンゼルスにて講演を行っている。ここでも少年期から身につけてきた英語力を遺憾なく発揮したのだ。

ところが、1924年にアメリカで移民法が施行され、日本からの移民が全面禁止となった。日本人のアメリカへの移民は、明治元年のハワイへの移民に始まり、アメリカの門戸開放政策によって、20世紀に入ると西海岸への移民が急増するが、低賃金で勤勉に働く日本人への排斥運動が徐々に強まり、ついにこの移民法が施行されるに至ったのである。これに憤慨した人たちの中には、英語教育の禁止を訴える人までいたのだが、嘉納治五郎は、むしろこういう時期だからこそ両国民の理解を深めることが重要だと主張し、1927年に日本英語協会を設立し、名だたる英語学者が集まる中、初代の会長に就任したのである。嘉納が一貫して国際協調主義を取っていたことの一つの証拠でもある。

「精力善用」「自他共栄」の講道館精神を唱道

教育者としての嘉納は、1920年に東京高等師範学校校長を依願退職して一線を退くが、

I O C 委員として欧米に赴くたびに、各国の教育事業の視察を積極的に行っている。そして、1922年に文化活動の推進を企図して講道館文化会を設立している。嘉納治五郎の講道館精神を表す「精力善用」「自他共栄」はこの設立時に発表されたものである。「精力善用」は精力の最善活用を意味し、自らの持てる力を最大限に発揮せよという教えである。講道館の英訳では、“Maximum Efficiency”となっている。「自他共栄」は嘉納の講演の中で「相助相譲自他共栄」と述べられており、助け合い譲り合って自他ともに幸せになろうという呼びかけである。英訳では“Mutual Welfare and Benefit”となっている。

筆者はこの二つの言葉は別々のものではなく、両方が揃って初めて意味を成すのだと考えている。人にはそれぞれ個性があり、持てる能力もさまざまである。ある人は自分の持てる力を最大限に発揮する。また別の人も自分の持てる力を発揮する。そういう多様な人々の力が集まれば、協働して一つのことが成し遂げられ、参画した者みんなが幸せになれるということだと思ふのである。そしてこれは個人同士だけのことではなく、集団同士でも当てはまるし、国同士でも同じではないかと考える。どの国もそれぞれ持てる力は異なるが、それぞれの国ができることを最大限に努力して行い、他国と協働して平和な世界を構築していく、国際協力にも繋がる思想であると思ふのである。

灘中学校創設の顧問として

嘉納は、自らの理想とする教育を実現するために、自分で学校を創設しようと考えていた時期もあったようだ。千葉県我孫子の手賀沼畔に一万坪を越える土地を取得し、一説によると我孫子駅から校地予定地までの並木道は完成していたとのことである。しかし、I O C 委員としての仕事に加えて、1922年には勅撰の貴族院議員に就任し、多忙を極めてこの計画を断念した。敷地は嘉納農園として貸し出したそうである。そういう矢先、出身地である御影の人たちから、私立の中学校を創りたいので力を貸してほしいと相談を受けたのである。

現在の阪神間と呼ばれる地域は、明治以降大阪の財界人が好んで住居を構え、子弟教育に熱心であった。神戸一中（現神戸高校）を筆頭に公立の中学校への進学は極めて難しい状況で、受験熱を緩和するために私立の中学校がぼつぼつと作られていくのだが、まだ不足している状況であった。そこで地域の有力者が相談し、地元出身で教育者として高名な嘉納治五郎に顧問を依頼したのである。前述のように、理想の学校の創設の夢を断念したところであった治五郎は、二つ返事で顧問を引き受け、菊正宗や白鶴という自らの親戚筋の大手酒造家に資金提供の依頼までした。そして、四半世紀以上に亘る東京高等師範学校での教え子の中から気骨ありと見込んだ者を校長に推挙した。この白羽の矢を立てられたのは、静岡県伊豆出身の眞田範衛。30代後半という若さであったが、すでに京都の亀岡高等女学校の校長であった。嘉納は眞田に電報を打ち、京都駅食堂に呼び出して、新中学校の校長就任を飲ませた。しばらくして眞田が校地を視察に行ったときは、校地となる住吉川原の空き地は、まだただの草原だったと回顧録に書かれている。校名は酒造りの地として全国的に知られているということで「灘中学校」と決まった。

眞田はスポンサーとなる酒造会社と相談し、校舎の建設から教員の招聘、生徒募集まで精力的に行い、翌年1928年の春に開校にこぎつけた。嘉納はその間何度も足を運び、眞田の相談に乗るとともに、建学の精神として「精力善用」・「自他共栄」を掲げた。これは現在に至るまで、校是として灘校教育の精神的柱となっている。また、学校運営の実務は一

切眞田校長に任せたのだが、開校後もたびたび訪問し、生徒たちを講堂に集めて訓話を施している。灘校が現在のような有数の私立中学高等学校になったのは、戦後の学制改革や兵庫県の学校制度などの外的要因に加え、教職員や生徒諸氏のたゆまぬ努力があったからではあるが、創立時に建学の精神を注入してくださった嘉納治五郎とそれを具現化するために教員や生徒の自由・自主・自律を保証する校風を築いた眞田初代校長の存在なしには、現在の姿は考えられないところである。

嘉納はその後も柔道をはじめとするスポーツの振興と国際交流に努め、体調不良で欠席した第8回五輪パリ大会を除き、第11回ベルリン大会まですべての五輪にIOC委員として出席し、欧米各地で講演をしている。また、国内各地でも「精力善用」「自他共栄」についての講演を行うとともに、柔道の動きを取り入れた「精力善用国民体育」という体操を考案。この普及のため全国の学校を回っている。60歳を過ぎてもなお、若者の育成に尽力を続けたのである。

東京オリンピックの夢

やがて嘉納は、オリンピックの日本開催を考えるようになる。永田東京市長の思いも一致し、1936年のベルリン大会の次、1940年の開催国として立候補することとなった。1932年第10回ロサンゼルス大会時のIOC総会の席上で永田東京市長の招待文を朗読した。1935年のIOC総会は多くの都市が立候補したため紛糾して開催地決定に至らなかったが、1936年第11回ベルリン大会に併せて行われた総会では、ヘルシンキとの決選投票となった。1933年に国際連盟を脱退し政治的には世界の孤児となった日本ではあるが、スポーツの世界では欧米との繋がりや切れていなかった。陸上競技や水泳で日本人選手が大活躍したときでもある。アジアで初のオリンピックに関心を抱くIOC委員もいた。ただ、問題は「ファーイースト」と呼ばれる日本と欧米の距離であった。当時は選手団を送るにしろ、船で何週間もかかった。日本招致の最終プレゼンティーターとして演壇に上がった嘉納は、得意とする流暢な英語で「1912年のストックホルム大会以来、日本はオリンピックへの出場を継続している。もし遠距離を理由に日本にオリンピックが来ないのであれば、日本からヨーロッパへの参加もまた遠距離であるから、出場する必要はないということになる」と堂々と発言し、見事アジア初のオリンピック招致に成功したのである。この時嘉納は75歳、日本国内では二・二六事件が起こった年であった。

しかしこの頃の世界情勢は、第一次世界大戦後結成された国際連盟による国際協調がもはや機能し辛くなっており、再びきな臭くなっていた。日本も、1931年の満州事変の結果、1933年に国際連盟を脱退することとなり、東京五輪開催が決まった翌年の1937年7月には盧溝橋事変が発生し、日中戦争が始まった。そして同年の11月に日独伊防共協定が締結されている。また、近代オリンピックの父と呼ばれ、嘉納の盟友であったクーベルタンが9月に74歳で逝去している。そんな中、嘉納は五輪開催を実現するため国内外で尽力し、1938年エジプトのカイロでのIOC総会に出席し、1940年に第12回五輪東京大会と第5回冬季五輪札幌大会の開催を確認したのである。

その帰路にも、ギリシャ、イタリア、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカを訪問し、東京五輪の成功に向けて精力的に活動したのだが、カナダのバンクーバーからの帰途、氷川丸船上で肺炎に罹り、横浜港到着の2日前の5月4日に帰らぬ人となった。享年77歳である。嘉納の晩年の大半はこの東京五輪開催に捧げられたと言っても過言ではないだろう

が、それを見届けることなく亡くなったのは無念であったことだろう。しかも、その2か月後、日本は、日中戦争の泥沼化と嘉納の死で国際協調派の勢力が弱まったこともあり、自ら五輪開催権を返上してしまったのである。もっとも、次点であったヘルシンキでの振替開催が一旦は決まったのだが、ヨーロッパでドイツがポーランドに侵攻して第2次世界大戦が始まったことから、結局は中止となったのではあるが。

嘉納の夢が引き継がれた 1964年の東京五輪

その後、日本は太平洋戦争への道を辿り、多くの人命を失い、国土を焦土と化して敗戦し、連合国軍による6年間の占領を経験した。1951年、サンフランシスコ講和条約を経て、再び独立国の仲間入りをしたが、オリンピックを開催するに足る国力と国際的信用を取り戻すには随分年月がかかると思われた。しかし、日本のスポーツ復興は予想以上に早く、1952年のヘルシンキ大会に参加が認められると、レスリングで石井庄八が金メダルを獲得した。そして1954年には1960年の開催に向けて立候補している。しかしこれは翌年のIOC総会でローマに敗れている。それでも1956年のメルボルン大会では体操の小野喬が金メダルを獲得するなど日本選手の活躍は続き、国の経済力も急激な成長を見せ、1964年開催に向けても立候補する。そして1959年のIOC総会で開催権を勝ち取ったのである。

その時、日本の五輪招致の最終演説をしたのは平沢和重。実は、平沢は嘉納治五郎が最期を迎えた氷川丸にたまたま乗り合わせていた外交官で、船上で嘉納からいろいろな苦労話を聞いた上に、肺炎で倒れた嘉納の最期を看取った人だったのだ。彼が招致演説の演壇に立った時、司会者からその旨が紹介されると、会場は一瞬にして静まり返ったそうである。そして、1940年の五輪招致の際の嘉納の演説を意識して、「西欧の人々は、日本をファーフューリストと呼びますが、ジェット機時代を迎えたいまは、ファーではありません。国際間の人間同士のつながり、接触こそが平和の礎ではないでしょうか。」と呼びかけたのである。割当時間が1時間あったのにわずか15分の演説であったが、IOC委員の心に響く名演説であったようだ。投票の結果は最初の投票で過半数を得るという大勝であった。嘉納が心血を注いでも見果てぬ夢に終わった東京でのアジア初のオリンピックが、ついに実現したのである。そしてこの東京五輪から、柔道が正式種目として採用された。嘉納が一生かけて残したのは、まさにオリンピック・レガシーと呼ぶに値するものだったと言えよう。

グローバル人材とは

このように嘉納治五郎は、スポーツを通じて国際協調を進めることに一生涯尽力したが、その姿勢は決して欧米に媚びるものではなかった。むしろ、日本初の柔道というスポーツを世界に紹介することを通じて日本文化の普及にも繋がったし、遠距離をおして五輪選手団を欧米の大会に送り込むことで、独立国家としての日本を世界に認めさせた。これらはいずれも、これまで既にあることの継承発展とは違って、全くの無から有を生じさせることなのである。

前東大総長の濱田純一は灘校出身なのだが、学生に向けてのスローガンとして「よりグローバルに、よりタフに」を掲げた。彼が言う「グローバルな力」とは、海外で活躍するというような地理的な次元ではなく、現在の自分が所属する世界では経験しないような未知なる課題に直面した時に、おじけづくことなく対処し解決する力である。そういう意味において、嘉納治五郎はまさに強靱なグローバル力の持ち主であったと言えよう。これか

ら未来において未知なる課題に対峙していかねばならない若者たちにとって、ロールモデルにすべき人物の一人として推薦する次第である。

2017年9月10日脱



執筆者紹介:

和田 孫博 (わだ まごひろ)

学校法人 灘育英会 理事
灘中学校・灘高等学校 校長



略歴

1952年 大阪市生まれ
1971年 灘高等学校卒業
1976年 京都大学文学部文学科(英語英文学専攻)卒業
1976年 母校に英語科教諭として就職
2007年 同校校長および学校法人灘育英会理事に就任 現在に至る

兼務歴

2011年～2014年 文部科学省中央教育審議会 高等学校教育部会専門委員
2013年～ 兵庫県私立中学校高等学校連合会常任理事
日本私立中学校高等学校連合会評議員
2017年～ 京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

専門分野:

私立中学校・高等学校の教育経営

研究テーマ:

公私協調の施策
高大接続改革
嘉納治五郎の教育哲学

ご意見、賛同、助言、ご提言を当財団までお寄せください。

一般財団法人「未来を創る財団」事務局 パブリック・コミュニケーション担当

abrighterfuture@theoutlook-foundation.org

未来を創る財団は、政治、宗教その他に対し一切関与、代表しない独立した第三者機関です。

© 2017 The Outlook Foundation, All rights reserved.